

## 26期生の皆様ー13

今は少しずつ日が長くなってきましたが、まだまだ寒さは続きます。いよいよ受験シーズンが始まりますが、体調管理にはくれぐれも気をつけて下さい。そんな忙しいときに、この通信を読んでもらおうとは思いません。ただ、丁寧に畳んでおいて、試験が終わって一息ついたときこそとこれを開いて読んでもらえれば嬉しいです。お話はまた新約聖書、特に福音書の歴史性について、です。



まず、福音書の著者はマテオ、マルコ、ルカ、ヨハネです。前回言ったように、福音書の中に著者の名前は出てきません。ではどうしてわかるかと言うと、最初からそのように伝えられていたからです。文書としては4世紀初頭に『教会史』という本を書いたエウセビウスという人（ヨーロッパではとても有名な歴史家）が、4人の名前を記録しています。

この4人のうち、マテオとヨハネは12使徒（イエスの直近の弟子）です。マルコはお母さんがイエス一行と親しかつたらしく、後にペトロの通訳となってローマに行つたらしく。そしてペトロの話しをもとに福音書を書いたそうで、彼の福音書は「ペトロの福音書」ともいえます。ルカは、パウロの第二の宣教旅行の時に洗礼を受けたらしく、生前のイエスを知りませんでした。後にパウロに同伴し58年から60年の間パレスチナに滞在し、そこでイエスを知った人々に取材して「すべてのことを始めから詳しく調べ」（1章3）福音書を書いたようです。

マテオ、マルコ、ルカの福音書は内容も重なる点が多いので、共観福音書と呼ばれます。この三つの福音書の系譜（関係）については、19世紀から色んな研究があり、現在ではマルコが最も古く、もう一つ今は失われたQと呼ばれる文書があり、マルコとQをもとにしてマテオとルカができたとかいう説が広く認められているようですが、決定的な証拠はありません。共観福音書はおそくとも70～80年台にできたようです。ヨハネの福音書は100年頃、また最後にできたことは確かです。

このヨハネの福音書は、共観福音書と比べてかなり変わっています。共観福音書に載っていない事件が詳しく叙述されていたり、逆に三つの福音書に載っていることが書かれていなかったりします。それはヨハネが自分の書いていることが真実であるとの自信があったことを示しています。もしその自信がなければ、すでに存在して権威をもつ三つの福音書とあれだけ違うことを書くことはできなかったでしょうから。

でも、そう言う「四つの福音書は同じイエスの言行録なのに、そんなに違うなんておかしいのではないか」と言われるかも知れません。その種の異同は共観福音書の中にも少なからず見られます。有名なものは、イエスの最後の晩餐についてです。最後の晩餐が木曜日の夜にされたことは間違いないのですが、共観福音書はその食事が「過ぎ越しの食事」（モーセの時代からユダヤ人が祝っている食事）であったと言います。他方、ヨハネの福音書は、あの年の過ぎ越しの食事は金曜日であったと言います。この矛盾を巡っては、過ぎ越しの食事のためには神殿で子羊を屠って焼く必要があったが、お祭りのときは大勢の巡礼者もいるのでとても一日では間に合わなかったので二日間にしたという説や、当時ユダヤ教の中心派閥のファリサイ派とサドカイ派では異なる暦を使っていて前者は金曜日に後者は木曜日に過ぎ越しの食事をしたという説などがあるのですが、いまだに解決していないらしいです。また復活の

朝にキリストが誰にどういう順番で現れたかという点も福音書によってかなり違います。

しかし、こういった異なる記述は最初の時代から知られていました。そして、キリスト教に反対する人はそれを見逃さず厳しく追及しました。ですから、もし初代教会がこの四つの福音書を誰かがねつ造したものだと考えていたなら、早速これらの矛盾する箇所を修正し、批判を避けようとしたはずです。事実、150年頃シリアのある作者が、それらのやっかいな食い違いをなくして四つの福音書を調和させた『ペトロの福音書』という本を書きました。しかし、教会はそれを正典として認めることを拒否しました。「教会は明らかに些細な食い違いはあっても、現在のような形のままで福音書を広めざるを得なかった」のです。それは「これらの4福音書が最も信頼のできる目撃者の記憶と報告を保存しているとの確信」があったからとしか考えられません。

異なる記述は、各福音書の著者が自分が見たとおり、聞いたとおりに書いたということを示していると考えられます。例えば、みんながある日稲佐山に遠足に行ったとする。その後で「先日の遠足について作文を書いて下さいと言われて書くとする。そうすると各自の作文では、細かいところでは異なっているでしょう。でも、全体的なところ、つまりみんながどこに行き何をしたかは読む人にちゃんと伝わるのではないのでしょうか。福音書の違いもこれに似て、そのような違いがあっても、福音書が伝えたいことはよくわかります。警察官は複数の証人に尋問するとき、証人の供述が全く同じなら、彼らが口裏合わせをしているはずだと考えるらしいですが、それは当然でしょう。各自が自分の見たことを話すなら各自の証言は微妙に異なるはずですから。



異同という点ではヨハネの福音書は際立っています。他の三つの福音書には全く載っていないことが詳しく書かれてあったり、逆に他の三人がみんな記録していることを省いたりしています。もしヨハネが自分の書くことが事実ではなくでっち上げたものだと意識していたら、このようには書くことはできなかったでしょう。

ですから、福音書には著者が見たこと聞いたことが書かれてあると言えると思います。もう一つの証拠は、聖書には「都合の悪い事実」がたくさん書かれていることです。たとえば、弟子たちの無能さ、失敗などがはっきりと書かれてあります。簡単な教えが理解できなかったり、だからといって単純素朴でもなく、「誰が一番えらいか」ということで論争したりする姿もちゃんと記録されています。その中で最悪のものは、弟子たちのリーダーに指名されたペトロが、イエスの裁判のときに「私はあの人を知らない」と三度否んだ（最後は「のろいかつ誓って言った」）ことでしょう。もしこの記述が、ある人々が言ったように、イエスの憐れみを教えるためにでっち上げられたものなら、福音書にイエスが後で彼を赦す場面は出てこないことは説明が付きません。

また四つの福音書には、人名や地名、当時のユダヤ社会の習慣や度量衡などが出てきますが、それらは他の史料や考古学の発掘で正確であることが証明されています。例えば、みんなが明治時代の福島県を舞台にした小説を書こうとすると考えて下さい。その地方の地理や当時の物の値段など山ほどのことをすごく慎重に調べなければだめでしょう。福音書の著者は確かに彼の時代、あの地方で生活した人々であることが読めばわかります（パレスチナではなく現在のトルコの人であったルカを除いて）。

それでは皆さん、落ち着いて実力を発揮して下さい。